

が高まり、又、有卵率が高くなるかを知ることは、防除対策上今後検討を要するものと考えられる。

ロ・健全木から餌木を設置する距離毎の、主として M.alt の産卵加害は、昨年度は 50cm の場合は全く産卵が認められなかった。本年は 10cm、30cm、60cm と、別図のように餌木を中央木に平行に設置した結果、中央木に対する産卵痕数は少なかったが、餌木において吹付けの結果からも、10cm～30cm の距離までは中央木に加害することが認められた。従って、或る部分に対する産卵加害を誘発する距離は、少くとも 50cm 以下の可成り近い範囲と思われる。

ハ・幼虫の人工接種に使用した虫態は、M.alt の場合は表皮喰害の初期幼虫、S.sp の場合は喰害期虫 (Y L 後期～L) の接種を行なった。S.sp の場合は伐倒木及び異帯木 (+～-) にのみ繁殖が認められたが、M.alt の場合は、各区毎の繁殖のかたちは可成り異常なものもあるが、各供試木ともに繁殖加害が認められた。従って、この幼虫の接種結果からすると、産卵加害前後の異常の進行によっては、特に M.alt の繁殖は促進され、喰害による異常の促進、引いては枯損が更に進むものと考えられる。

## クヌギの葉を食害するオオクシヒゲシマメイガの発生について

宮崎県林業試験場 家 入 忠

### 1. ま え が き

クヌギの葉を食害する幼虫として、ドクガ、イラガ、シヤクガ、カレハガ、ヤマムユガ、シヤチホコガ、の各科などがあげられる。ところが、この春ここにくる、メイガ科の中で、オオクシヒゲシマメイガが発生し現地の被害の状況から林木の生育上重要なので報告する。

本害虫の観察記録、飼育などに関して、御指導、御協力いただいた宮崎大学農学部、清水薫先生をはじめ同室の中島義人、坂之下旭先生方の御好意に深謝する。

なおオオクシヒゲシマメイガの同定に際し、九州大学農学部生物防除施設の植松秀男先生の手をわずらわしたので謝意を表す。

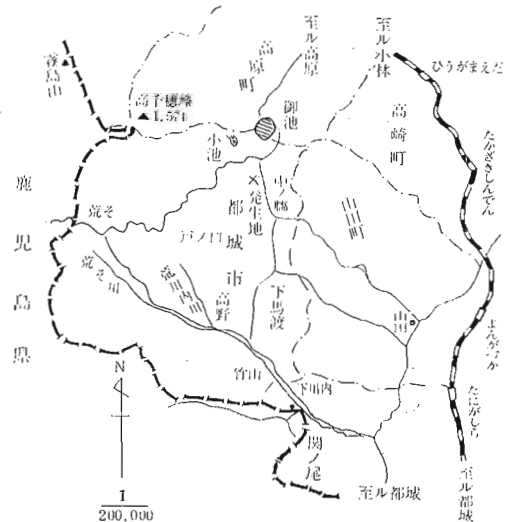
### 2. 発 生 場 所

宮崎県都城市西岳町、牛ノ蹄宮崎県の南部霧島山連山、高千穂峰の山ろくにつながり、都城市役所より北西に 30km の位置にあたる。(第 1 図参照)

### 3. 発 生 林 分 概 況

地形は全体的に南西に面し、標高 360～400m の丘陵地形を形成している。放牧地の隣接地で、霧島国有林 41 林班さわ小班部分林のクヌギ林 3～8 年生の新植お

第 1 図 発生地位置図



よび萌芽林であり、一部コナラも混生している。面積は 12.00ha で、特に被害の甚だしい範囲は、2.00～3.00ha と推定され南に面した部分が被害も大きい。

### 4. 観 察 結 果

食害するのは幼虫態で、加害の甚だしい 1～2m の 3 年の若木は、大部分の葉に食害のあとが見られ、8 年

程度の高木は枝先新芽が被害されている。所有者、田中末吉氏の話から、本害虫の発生は4月中旬ごろから若葉に生息しているのを見かけたということである。当場では5月中旬現地より幼虫を採集飼育した、飼育の結果から、5月末ごろから枝葉に糸を張って繭を作りその中に棲み蛹となり、6月中旬繭をやぶって成虫となって出た。幼虫の体長は25—30mm、体はわずかに扁平で頭部は大きく茶褐色である。突起や硬皮板、瘤起などなく腹部に沢山の横皺である。刺毛は長いがほとんど目立たない、腹脚は5対あり胴部は黄色の気門下線を界として、背面は黒色で鮮黄色の亜背線を走らせる。胸部および後部では黄色斑があり気門は黒色、腹面は紫色であり腹線は黄色をしており胸脚は褐色である。

成虫は頭部、胸部および前翅は赤褐色、腹部は灰褐色である。前翅基部と外縁は黄褐色を混じえて、外縁

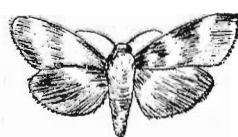
線は淡色で緑毛は暗褐色、後翅は暗褐色で緑毛は灰白色をしている。翅の開張は28mm内外である。

### 5. むすび

現地の被害の状況から、新葉が次から次に食害され葉量は減り、林木の生育は阻害されクスギ林造成におよぼす影響は大きいのではなからうか。

こんご本害虫の生態を調べ防除方法の確立に努めたい。

オオクシヒゲシマメイガ幼虫      オオクシヒゲシマメイガ成虫



参考文献 河田 薫 日本幼虫図鑑

## スギ赤枯病防除試験

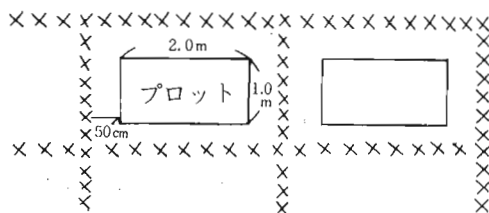
鹿児島県林試 勝 善 鋼

本試験はボルドー液にかわる新薬の開発を目的に林野庁のメニュー課題として、昭和44年に実施したものである。1、2の薬剤に防除効果の期待できる成果が得られたので報告する。

### I 試験の方法

- ① 場所：鹿児島県始良郡蒲生町下久徳
- ② 供試苗及び試験区：1プロットノ1m×2mとし、1回床替2年生苗を36/m<sup>2</sup>本植栽して供試した。プロットの周囲には第1図に示したように2年生(山出し苗)の罹病苗を30cm間隔に植栽し、感染源にした。

第1図 プロット×罹病苗(感染源)



各処理は乱塊法により3回反復した。

③ 植栽日および管理状況。

床替月日：昭和44年3月31日。施肥：堆肥 3kg/m<sup>2</sup> 住友森肥料特号(N20. P10, K10) 30g/m<sup>2</sup>。除草：雑草の繁茂状況により随時手で除草した。

④ 供試薬剤及び散布方法。

6月8日まではm<sup>2</sup>当り250cc、7月15日以降は300ccずつ、リノールを3~4滴/3ℓ滴下し、かくはんして、小型噴霧器で苗木全体にむらなくかかるよう丹念に散布した。

薬剂名	有効成分	希倍	散布回数
マンネブダイセン	マンガニースエチレンビスジチオカーバメート 70%	400	9
ジマンダイセン	70%	400	〃
サニパー	3,3'-エチレンビス 70%	350	〃
オキシンドー	8-ヒドロキシリン 50%	500	〃
ボルドー液		4-4式	〃
〃		〃	11
無散布			